

目的：人間の食習慣や食嗜好形成の基盤は風土であり、その基盤の上に個人の嗜好が形成される。個人の嗜好形成の主要な要因は、母親（毎日の食事担当者）の食生活意識であることは、筆者の昭和30年代から40年代前半までの食態調査を通して確認した。短期大学部で家政学を専攻し、将来食生活管理者としての活動が期待されている学生の専門性により高めるために、家庭における食教育および調理技術の伝承と、母親の食生活意識との関係に視点を置き食態調査を試みた。今回は近年特に変化がみられる食食に関して報告する。

方法 1987年7月～9月、東京在住の短期大学で家政学専攻の1年生250人とその母親、栃木県某女子高等学校3年生280人（将来家政学専攻を希望している生徒）とその母親を対象に調査用紙を配布し、自記方式で調査した。その結果を林式数量化且類で分析を行った。

結果 調査用紙回収率68%、母親の食生活意識を9パターンに分類した。1) 健康志向性、2) 手作り志向性、3) 演出志向性、4) 社交志向性、5) リーダーシップ性、6) 食生活革新性、7) 食生活創造志向性、8) 多忙性簡便志向性、9) 便利生活志向性。母親の食生活意識の高さと子供の食生活満足度は確定的に一致してはいない。また母親の調理技術と意識の関係も同様に確定的な関連性がみられ、母親の意識の低下は調理技術の低下に結びついている。これらの結果と教育の中に生かす必要性が認められた。